THE AMERICAS TODAY

天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 87　　2022 年 11 月

Special to the Newsletter

人を分類することについて

志柿　光浩

カリブ海域に位置する米国領プエルトリコに興味を持ち、その歴史、文化、社会について日本の読者に紹介してきた。1984 年から 1989 年まではプエルトリコで暮らし、その後も折にふれて再訪した。さらに、島を出たプエルトリコの人々の状況を知るために米国各地のプエルトリコ人コミュニティを訪ねた。ニューヨーク、ニュージャージー、マサチューセッツ、コネチカット、フロリダ、カリフォルニア、テキサス、ハワイの各州や米国領ヴァージン諸島などを訪れ、米国の様子を多少とも観察する機会を得た。その中で、人を分類することについて考えさせられることが多かったので、この機会にそのことについて少し書いてみようと思う。ほかで書いたことも含まれるが、それはお赦しいただきたい。

Chinos, japoneses, puertorriqueños（中国人、日本人、プエルトリコ人）

人は他人を分類せずにはいられない。1980 年代当時のプエルトリコでは、車を運転して信号待ちをしているとワイパーを持った人たちが車列の間に現れ「車の窓を拭くけど」と聞いてきたものだ。そういうことを強制されるのが嫌で “No.” と応じた。以下はそれに続くやりとり。

プエルトリコ人：¡Chinos!（中国人どもめ！）

私：No somos chinos. Somos japoneses.（俺たちは中国人ではない、日本人だ。）

プエルトリコ人：No. ¡Ustedes son malos chinos!（いいや、あんたがたは極悪中国人だ。）

¡Chino! 呼ばわりには面白い撃退法があって、永年プエルトリコ大学体育学科で柔道を担当して来られた冨田宏美先生が実践しておられるのはこんな感じだ。

プエルトリコ人：¡Chino!（中国人！）

先生：¿Qué?, cubano.（何だ、キューバ人。）

プエルトリコ人：No soy cubano. Soy puertorriqueño.

（俺はキューバ人なんかじゃない。プエルトリコ人だ。）

先生：¡Peor!（もっとひどいじゃないか！）

キューバの人には申し訳ないやりとりだが、兄弟国にも擬せられるキューバに対して複雑な

感情を抱くプエルトリコ人にとって、返す言葉のない鋭い切り返しだ。ただ、直接こちらに使われると最初のエピソードよりも悲惨なことになりかねない。やはり冨田流がよろしい。

プエルトリコ人：¡Chino!（中国人！）

日本人：No soy chino. Soy japonés.（俺は中国人なんかじゃない。日本人だ。）

プエルトリコ人：¡Peor!（もっとひどいじゃないか！）

Chinos と街で呼ばれることについて気にする必要はないという人がいる。差別されても対応するなという態度だ。今はそういう時代ではない。人間についての勝手な仕分けは、偏見・差別・憎悪となって人々の脳裡にこびりつく。米国でアジア系住民への暴力事件が相次ぐ背景には、社会に染み込んだ人間分類の悪習がある。対応を怠ってはいけない。

U. S. Census（米国センサス）

人を分類するのが目的なのが国勢調査。米国の国勢調査はセンサス（census）という。というより census の訳語が「国勢調査」だ。米国のセンサスは 1790 年に始まっているから、1920 年に始まった日本の国勢調査よりずっと歴史がある。米国センサスは 18 世紀末の開始以来現在まで、自国住民の分類に腐心してきた。初回 1790 年センサスの質問項目はシンプルかつ象徴的だ。

■ 世帯主の姓名 ■ 16 歳以上の free white male の数 ■ 16 歳以下の free white male の数

■ free white female の数 ■ その他の free person の数 ■ slave の数

当時の支配的な人間観が反映されている。16 歳を過ぎた白人の男は働き手、兵隊として一人前。他は半人前かそれ以下。もっとも、当時の日本では士農工商穢多非人で人を区分し、女は数の外だった。

このような分け方で住民の数を調べることから始まった米国センサスは、その後、時代と共に調査項目と選択肢を変えながら現在に至っている。その変遷の過程を初回から 2010 年まで１ページにまとめて図示したものが米国センサスのウェブサイトにあるのでご覧いただきたい。米国の社会構成の変化が反映されていて興味深い。なお Chinese は 1860 年、Japanese は 1890 年から人種の選択肢に加えられた。

（United States Census Bureau. “Measuring Race and Ethnicity across the Decades: 1790–2010”
https://www.census.gov/data-tools/demo/race/MREAD_1790_2010.html ）

プエルトリコや米国のラテン系住民に関心のある者には、1970 年センサスが重要な意味をもつ。この年に「ヒスパニック」（Hispanics）に関する調査項目が初めて加えられた（但しこの時は 5% 抽出調査）。注目されるのは「ヒスパニック」に関する質問が「肌の色や人種」（color or race）と別に扱われていること、そして提示された選択肢の内容だ。

4. COLOR OR RACE（肌の色あるいは人種）○ にチェックせよ。

○ White ○ Negro or Black ○ Indian (Amer.) -Print tribe ○ Japanese ○ Chinese ○ Filipino

○ Hawaiian ○ Korean ○ Other-Print race

13b. Is this person's origin or descent-（この者の出自は）○ にチェックせよ。

○ Mexican ○ Puerto Rican ○ Cuban ○ Central or South American ○ Other Spanish

○ No, none of them

後者の質問には、後に ethnic origin（エスニック出自）というカテゴリー名が与えられていく。「日本人」は人種名だが「プエルトリコ人」はエスニック名なのが不可思議なところだ。当時の米国政府は「白人」にも「黒人」にも分類できないラテン系住民という人間集団の存在が無視できなくなり、その規模を把握する必要に迫られていた。メキシコ人、プエルトリコ人、キューバ人が名指しなのはこのグループが特に多かったから。とは言え、このようにメキシコ人、キューバ人と横並びにされてしまっては、生まれながら米国籍を持つプエルトリコ人も、米国外からの移民集団と混同されてしまう。

¿Puertorriqueña o dominicana?（プエルトリコ人？それともドミニカ共和国人？）

米国センサスは不可能な営みへの終わりなき挑戦に思える。人を分類し始めるとキリがない。

プエルトリコ人と他集団出身者が子を成すことも多い。映画「アバター」のゾーイ・サルダーナは父がドミニカ共和国、母がプエルトリコ。アクション映画などで活躍するミシェル・ロドリゲスは父がプエルトリコで母がドミニカ共和国だ。ヨーロッパからの移民の間で当たり前だったことが、ラテン系住民でも起きているだけの話。これは日本でも同じで、私の周囲には両親が共に日本国籍以外の国際結婚、子は日本で生まれ育ち、第 1 言語は日本語という家族が数家族いる。この子たちをどう分類する？

ラテン系住民の人種認識も変化する。以前はラテンアメリカ基準で「白人」と答えていたのが、違う選択肢を選ぶ傾向にある。多様性拡大に伴い複数回答も導入された。変化に対応すべく 2020 年センサスでは人種とエスニック出自に関する選択肢がこれまでで最も細分化されていて紙幅に収まらない。

これは研究者には厄介だ。「2020 年センサスによれば、ヒスパニックは米国人口の 18.7% を占める」と安易には書けない。プエルトリコ人に限定しても同じことで、定義を細かく説明する必要がある。実は以前も同じことだったのだ。分類に入りきれない人がいたのに目をつぶっていた。かと言って人の分類をやめればいいわけでもない。プエルトリコやその他の地域に出自を持つ人々の増減傾向を知ることは、米国社会の実像を知る上で欠かせない。センサスには頑張ってもらうしかない。

もともとセンサスは誤差だらけ。それを織り込んだ上で、社会が必要とする範囲で続けるしかないし、そういう前提で解釈する性格のものだ。一方、個人レベルの他者認識では分類はやめるのが正解だろう。とはいえ No soy ni chino ni japonés. Soy humano.（俺は中国人でも日本人でもない。人間だ。）とまでは言えない自分がいる。いつか悟りの境地に辿り着ければよいのだが。

（しがき・みつひろ／東北大学名誉教授）

Scenery

文学の中のアメリカ生活誌（78）

新井　正一郎

Creoles, New Orleans (クレオール、ニュー・オーリンズ)　1682 年、フランス人の探検家ラ・サールは、五大湖からミシシッピ川とその周辺地域を探検し、その広大な地域（アーカンソー、カンザス、ルイジアナ、ミズーリ、ネブラスカ、ワイオミングなど後に 12 の州となる地域）をフランス領と宣言し、当時のフランス国王ルイ 14 世の名を冠して、Louisiana（ルイのもの）と命名した。ところが 1802 年、イギリスとフランスとの間に結ばれたアミアンの講和によってヨーロッパの戦況が収まると、フランス政府はルイジアナ領土をスペインに割譲した。以後、フランス植民地の首都ニュー・オーリンズ（New Orleans）もスペイン支配下の街になる。しかし新大統領ジェファソンの就任後まもなく、皇帝の道を進んでいたナポレオンは弱いスペインに圧力をかけ、ルイジアナの支配権を奪った。アメリカの大統領はこの報に接すると、動揺した。ニュー・オーリンズは、オハイオ川、ミシシッピ川渓谷の農産物の輸送のため、絶対に必要な港町であったからだ。弱体化していたスペインでさえ、アメリカの開拓地の交通と安全には脅威であった。当時ヨーロッパ最強のナポレオンによる帝政がアメリカ合衆国に再度大規模な植民地を築けば、合衆国はどれほど大きな混乱状態に陥るかわからなかった。そうしたアメリカに幸運な出来事が起きた。1790 年代、海軍基地を建設する予定のフランス領サンドマング島で原住民の反乱が起き、24,000 人のフランス軍が全滅になった。さらに 1803 年に入ると、フランスとイギリス、ロシア、オーストリア 3 国との戦争が必至になっていたので、ナポレオンはルイジアナ全領域の維持は困難と判断し、これを格安 (1,500 万ドル) でアメリカに売り渡したのだ。そのようなわけで当時のニュー・オーリンズでは、フランス語、スペイン語、アフリカの言葉が飛びかい、クレオール文化が花開いていた。Creole とは 1792 年頃からルイジアナに移住したフランス人、スペイン人の子孫を意味し、特にフランスからの上流社会に属する人々を指した。元は植民地生まれを意味するフランス語の créole からきたものだ。上流階級に雇用された奴隷も creole と呼ばれ、1829 年にはアフリカから連れてこられた黒人奴隷と区別して、ルイジアナで生まれ育った黒人に用いられるようになった。

ニュー・オーリンズとそこに住むクレオールとの遭遇が、新しい文学を生み出す契機になったといわれる作家にウォルト・ホイットマンがいる。彼が『草の葉』を刊行したのは、1855 年、36 歳の時である。時折平凡な詩を書いていた二流のジャーナリストが、どうしてアメリカとアメリカ人を称える偉大な詩を書けたのか、いまだに謎である。一つの要因として彼が若い頃に弟と共に体験した南部の都市ニュー・オーリンズの影響をあげることができる。詩集『草の葉』を出す 7 年前、彼は奴隷制度の問題で勤めていた『イーグル』紙から解雇されたので、ブロードウエイ劇場のロビーで『ニュー・オーリンズ・デイリー・クレセント』紙の経営者と契約を結び、馬車で南の未知の都

市に向かった。2月11日のことであった。アレガニー山脈を越え、ウエスト・バージニア州ウィーリングに入ると、眺めは一変した。それまで住んでいたニューヨークという移民でごったがえす狭い不潔な地域と違い、彼の想像力をかきたてる壮大な大自然の景観があった。ウィーリングからの２週間の船旅も驚きだった。ホイットマン兄弟が、ミシシッピ川の三日月形に湾曲した川辺に広がった奴隷制度容認のニュー・オーリンズに着いたのは、アメリカとメキシコとの間にグアダルーペ条約が調印されてから３週間ほど経た２月25日であった。最初の下宿の近くに黒人奴隷を競売している店があったので、何度か見物に行った。『イーグル』紙時代の彼は、盛んに奴隷制反対の記事を書いていたが、ニュー・オーリンズでの彼は、同僚の編集人の目を気にし、黒人奴隷への反対姿勢をはっきりあらわすことはなかった。時間があると、彼は波止場から市場まで、２時間ほどぶらつき、原始的、開放的なクレオールの世界を観察し、『クレオール』紙に描画するのを常としていた。時折目に入る思いがけない光景―常に楽しそうに、談笑する人々、彼の好みの言葉で言い換えれば、「生命の愛撫者」に、すっかり魅せられていた。現地生まれの混血人、生き生きとした声をあげて、かにを売っているクレオールの女性、ありのように働く新聞売り子、船のデッキの汚れを楽しそうにごしごし磨いている船乗りなどがそれである。ポーク大統領がメキシコへの宣戦を布告した頃の彼は、多くのアングロアメリカ人と同じく、ラテン系を対立的に捉えていた。ところが、ニュー・オーリンズの人種的複雑に引き付けられると、彼は蔑視していたラテン人をアメリカの仲間だという。後に書いた詩にはこうある。「旅行者用のコーヒー店で彼を見ると、自分の仲間だと言う。イタリア人あるいはフランス人もきっとそうする、ドイツ人も然り、スペイン人も、キューバ島の人もそうだ」。彼のアメリカの見方が、ニュー・オーリンズ滞在によって、多人種集団のアメリカに傾斜していくのだ。もっとも晩年にはアメリカが完成するためには、大きな宇宙に吸収されなければならないという脱アメリカの姿勢をとっている。

もうひとつ、歌いこまれた、自己の肉体につながるものとして、フランス街と呼ばれるニュー・オーリンズの中核部にある劇場で見た裸の人物のショーがある。多くの北部の新聞が、当時の見慣れない新しさ、すなわち裸像に重点を置いた絵画や彫刻に反感を示したなかで、「人体は不純な心を持つ人々によって、下品だと思われるが、実際は想像の傑作である」という彼の所信は、伝統的な道徳観を根底から揺さぶり、事実直視を大きく促すものだ。またこの頃に書いたと思われるノートに、こうある。「私はその神秘がわからないが、いつも自分が２人であることを意識している―魂と私とを」。当初、『クレセント』紙の仕事は楽しかった。しかし間もなく金銭上のことで『クレセント』紙の経営者と争いになり、前から赤痢にかかっていた弟が、寝込んでしまったため、彼とニュー・オーリンズとの出会いは、わずか３ヶ月で終わった。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

【アメリカス学会夏期定例研究会・発表要旨】

古代アンデスの神殿における工芸品製作
―パコパンパ遺跡出土資料の分析をもとに―

荒田　恵

本発表では、神殿であるパコパンパ遺跡の出土資料の分析をもとに、形成期社会における工芸品製作の位置づけを試みた。

日本人研究者の定義によると、形成期とは神殿を中心に社会が統合されていた時代である。ペルー北高地に位置するパコパンパ遺跡は、形成期中期相当のI期（前1200年～前700年）から後期相当のII期（前700年～前400年）にかけて利用された。形成期中期には、アンデスの広範な地域で神殿の数や規模が拡大し、壁画や土器等に表現される図像が洗練され神殿建築が複雑化するなど、社会が大きく変質した。そして続く後期では、社会階層の差が顕在化した。

同遺跡の最上基壇より出土した土器以外の資料の分析からは、石製玉製品や骨角製品の製作、紡織そして冶金が行われ、威信財として装身具や儀礼用具が重点的に製作されていたことが指摘できた。また、II期以降、複雑な構造をし、質の高い副葬品を多数伴う「貴婦人の墓」や「ヘビ・ジャガー神官の墓」が確認され、社会的なリーダーやエリート層が出現することが明らかになっている。これらの墓の副葬品には、精製土器のほかに金製あるいは石製の首飾り等の装身具が多く含まれることから、こうした威信財を所持し使用することがエリート層の権力基盤の一部を構成していたと考えられる。また、これらの墓に銅鉱石等の粉末が意図的におさめられていたほか、「貴婦人の墓」がつくられた中央基壇の小部屋からは、鋳塊のような銅製品が出土したことから、彼らは原材料や製品の流通をコントロールしていたことが想定された。

威信財の製作については、エリート層が自ら行っていた可能性が高い。「ヘビ・ジャガー神官の墓」がつくられた半地下式パティオの周辺では、装身具等の威信財とともに、道具や未製品が副葬されるII期のエリート層の墓が確認されている。そして、それ以外の同時期の墓から、製作活動を連想させるような道具や未製品がほとんど出土していないことは、その妥当性を示唆するものであろう。なかでも冶金に関しては、金属加工をおこなったと推定される部屋状構造物群が、中央基壇の裏側に隠れるように配置されていることから、特に地位の高いエリートが、製作活動を含めた冶金活動全般をコントロールしていたと考えられる。

エリート層が威信財の製作に中心的に関わるようになったII期は、製作自体が儀礼行為の一環として行われたことも指摘できる。周辺にエリート層の墓が集中する半地下式パティオでは、II期に饗宴儀礼が行われていたことが明らかになっているが、饗宴のコンテクストからは、儀礼用具とともに、威信財の製作に関わるような道具や未製品が集中して出土することが確認されている。とりわけ、紡織や石製玉製品の製作、そして冶金との密接な関わりが示唆される。

こうしたパコパンパ遺跡における工芸品製作は、その在り方がエリートの権力基盤となったマヤ文明と類似している。一方で、両者のエリート層の実態は異なり、パコパンパ遺跡の工芸品製作はエリート個人ではなく、儀礼をおこなう公共的な空間である神殿と深く結びついていたことが示唆される。このように儀礼空間や特定の宗教イデオロギーと密接に関連した工芸品製作は、個人の政治・経済的な権力基盤として発展できなかったのかもしれない。

［主要参考文献］

関雄二（2006）『古代アンデス　権力の考古学』京都：京都大学学術出版会

Costin, C. L.（2001）Craft Production Systems. In Feinman, G. M. and T. D. Price (eds.) *Archaeology at the millennium*: asourcebook, pp.273-323, Kluwer Academic / Plenum Publishers

Costin, C. L. (ed.)（2016）　*Making value, making meaning: Techné in the Pre-Columbian World*.

Dumbarton Oaks
Inomata, T.（2001） The Power and Ideology of Artistic Creation. *Current Anthropology* 42(3): pp.321-348

（天理大学附属天理参考館　学芸員）

フィエスタ開催への期待
―メキシコ、オアハカ州の事例より―

山内　熱人

私は 10 年以上にわたってメキシコ、オアハカ州の村落において移民や祝祭をテーマにフィールドワーク調査を続けてきた。調査地では誕生日、人生儀礼、学校行事、地域の守護聖人の祭りなど祝祭や宴会をまとめてフィエスタと呼んでいる。

地域の守護聖人の祭りは村祭り的な側面を持ち、一年に一回、地域の守護聖人を対象として行われる祝祭で、持ち回りの委員によって統括される。これも含めてカトリックのカレンダーに基づいたクリスマスや復活祭などの年中行事などは典型的なフィエスタである。一方で、サクラメントを筆頭としたカトリックの人生儀礼も、主にそれに伴って開かれる宴会を意識してフィエスタと呼ばれる。その他、様々な人生の節目となるイベント（学校の卒業、家の建築、車の購入など）に絡んで宴会が催され、カトリックの人生儀礼と同じくこういった機会においても擬制的な親族関係である代父母関係の構築が伴うことがある。フィエスタと一口で言ってもこのように年中行事としての側面を持つフィエスタと個人の人生儀礼としての側面を持つフィエスタがあり、その重要度に応じて様々な規模の宴会が催される。大規模なものになると、実父母と代父母の家のそれぞれで宴会が行われ、それらが合流して数百人規模の人数が集まる宴会が三日間にわたって行われる。

フィエスタは招待者の数に応じて開催の規模が大きくなり、開催者に対する経済的な負担は大きい。また、参加者も贈り物の持参義務の負担を負っている。それゆえ、半ば義務となるカトリックの人生儀礼でさえも、その負担感から二の足を踏むこともある。その対応として、人間関係を絞って参加者の数を減らしたり、複数のフィエスタ開催機会を一回にまとめるなどといった費用を抑える工夫も観察された。

従来のカルゴシステム研究では、共同体組織論をベースに、祭りを運営することで共同体の社会的統合を達成し、見返りとして、個人は社会的な威信を獲得すると論じられてきた。しかし、今日的な祭りでは、個人的な聖人との誓約が動機としてより重要になっていると吉田（1995）は指摘している。この指摘は共同体の祭り以外のフィエスタ開催の動機についても聖人信仰を軸として考えることで理解が可能となる考えではあるが、全てのフィエスタが聖人との誓約のような宗教的な動機で説明できるわけではない。私は、調査地において人々からの勧めに応じて誕生祝のフィエスタを開くことを促されたが、その開催への圧力は宗教的動機ではなく、人々との関係性こそが念頭にあった。フィエスタを開催することや参加することによって人々の関係が構築、維持されている一方で、逆にフィエスタの開催や参加から距離を置くことは関係性の希薄化へとつながっていくのである。

［参考文献］

小泉潤二 1987「儀礼と還元論―中米の事例と機能主義」『「儀礼と交換の行為」現代の社会人類学２』伊藤亜人他編　東京大学出版会、pp.57-84
黒田悦子 1988『フィエスタ：中米の祭りと芸能』平凡社
清水透 1990「メキシコの民衆宗教」『民衆文化』柴田他編　岩波書店、pp.225-251
吉田栄人 1995「先住民社会の祭礼と政治」『メソアメリカ世界』小林致広編　世界思想社、pp.183-232

（同志社大学　ラテンアメリカ研究センター
嘱託研究員）

お知らせ

◇天理大学アメリカス学会は、きたる 12 月 3 日（土）13 時から天理大学研究棟 3 階第 1 会議室において、「第 27 回年次大会シンポジウム」を開催します。Zoom での参加も可能です。オンライン参加を希望される場合は、本学会までメールでお知らせください。来場者は、マスク着用をお願いいたします。

【概要】テーマ：「アメリカス地域の文化と言語の学びと継承」

言語と文化のつながりは、その国独自の言語が人の精神や思考に影響し、その国固有の文化を生み出す。言語と文化は相互に関連しているため文化を扱わずに言語を教えることはできないというように、言語教育と文化教育は相互補完的な関係である。アメリカス地域では、ネイティブ固有の言語文化の重要性は認識されつつも、移民がもたらした言語文化が各国の基礎的な言語資源、文化資源となっている。さらにグローバル化時代においては、人の移動の増加に伴い、言語教育でも学習者の背景が多様化し、母語を共有していないことも多くなっている。今後どのように言語と文化を継承していくのか、また継承させていけるのか。本シンポジウムでは、「言語継承」と「文化継承」を言語学習など多様な観点から検討すると同時に、グローバル化した世界に生きる我々の「言語文化」について再考する手がかりにしたい。

【大会プログラム】

＜総会＞

13：00 ～ 13：15
　開会挨拶・活動報告・会計報告

＜パネルディスカッション＞

13：15　開会の辞

13：20 ～ 14：20　基調講演
　吉田栄人氏（東北大学大学院国際文化研究科）
　「植民地時代カトリック宣教師のマヤ語文法と現代のマヤ語研究をつなぐ」

14：30 ～ 14：50　パネル 1　大川ヘナン
　「言語・文化継承は選択可能なのか？在日外国人集住地域を事例に」

14：50 ～ 15：10　パネル 2　市川禎理
　「複数人会話における話者交替と発話の重なりに関する日西対照分析」

15：10 ～ 15：30　パネル 3　橋本和美
　「スペイン語を取り入れた漫才ワークショップ―オンラインと対面授業の比較―」

15：30 ～ 15：50　パネル 4　山本享史
　「米国ハワイ州の外国語教育 “World Languages” プログラムから」

15：50 ～ 16：10　パネル 5　小林千穂
　「日本の大学生の 4 年間の英語学習モチベーションの変化」

16：10 ～ 16：20　休憩

16：20 ～ 17：00　ディスカッション

17：00　閉会の辞

編集後記

◇今号の巻頭言を執筆してくださった志柿先生は、日本で数少ないカリブ海域の研究者です。本学会では南北アメリカを架橋する研究や視点が十分でなかったと思いますが、その陥穽を埋めてくださる論考だと思います。グローバル時代における国とエスニシティを考えるための興味深い視座が記されており、いずれ多文化社会を生きるとはというテーマについて改めて考えてみたいと思います。今年の年次大会は文化と言語がテーマです。どうぞ多数ご参加ください。

☆新入会員：

市川禎理（2022 年 8 月入会）

天理大学アメリカス学会ニューズレター
（No. 87：2022 年 11 月 9 日発行）
発行者：山田政信
〒 632-8510　天理市杣之内町 1050
天理大学アメリカス学会
e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp
http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/